

留学を終えて

岐阜高等学校 佐藤 愛悠（イタリア）

私は10か月間イタリアの高校に留学しました。日本を飛び立ちイタリアに向かう際にはフライト時間が計16時間も掛かり、出された機内食を、この量では足りないなと思いつつ、これからどんな生活が始まるのかドキドキしていました。言葉が分からず、まともにコミュニケーションをとることもできないのに、無事に生活できるのか不安でいっぱいでした。

イタリアに到着し、重い荷物を抱えて空港からさらに電車に乗り、ようやくホストファミリーに会うことができました。ホストファミリーとは事前に連絡が取れなかったので、会えたときには本当に安心しました。私と同じようにイタリアに来て、一緒に移動した仲間の子が安堵のあまり泣き出し驚きましたが、自分もつられて泣きそうになりました。ホストファミリーに会えてほっとしたのも束の間、いきなり「海に行こう」と言われ、びっくりしました。最初、何を言っているのかなと思いましたが、本当に連れて行かれたのは海でした。海のない岐阜県で生まれ育った私は俄然テンションが上がり、不安な気持ちなど吹き飛んでしまいました。

到着したのは9月で、イタリアではまだ夏休みでした。それから1週間が経過し、学校が始まりました。イタリアの高校は5年制で、私は2年生に配属されました。同級生が2009年生まれの子たちでしたが、みんな大人っぽく、色々なことを教えてくれました。日本とは違い、1クラスあたりの人数が20人と少なく、イタリアは高校から学科を選択できて、音楽科、人文社会科、建築科、古典文学科など様々な学科があり、日本の大学のように驚



きました。私は言語科のクラスに入りました。イタリア語でさえまならないのに、スペイン語とフランス語、英語の授業を受けることになりました。帰国する頃にはマルチリンガルになれるのかと思いきや、結局習得できたのはイタリア語だけでした。語学は難しいと実感しました。

留学して、心の底から痛感したのが言語の壁です。3か月が経過したら聞き取れるようになると聞いていたのに、3か月経っても1文の中に分かる単語が2つあるかないかといったありさまで、自分がまともにイタリア語を理解できる日が果たしてくるのか想像もつきませんでした。しかし振り返ってみると、急に分かるようにはなりませんでした。徐々に理解できるようになっていったと思います。他のヨーロッパの国からイタリアに留学に来ていた子は母国語と似ていたり、自分の国の学校の授業でイタリア語をすでに学んでいた子ばかりで、私ほど困難を感じていないようで、彼らと自分を比べて落ち込むこともありました。

留学期間、何度もマイナスな気持ちになりましたが、そんなときに前向きになれたのはホストファミリーがいたからです。2組のホストファミリーにお世話になりましたが、最初のホストファミリーは、子供が4人いるにぎやかな家族でした。子供たちはみんな留学経験があったので、

自分が留学生だったときのことを話してくれたり、ささいなことでもよく気にかけてくれたりしました。そのうちの1人は日本に留学したことがあり、日本語とイタリア語を混ぜて会話する不思議な感覚を味わいました。2組目のホストファミリーは年下のホストシスターが2人いて、よく一緒に買い物に行ったり、料理したりしました。イタリアには日本が好きな人が多く、日本のアニメを見ていたり、日本に旅行したことがあったりして、話を聞くことが多々ありました。また、地域の図書館では日本語講座が開かれており、意外な発見でした。自分の国が他の国の人々に好感を持たれていることを知ると、嬉しい気持ちになりました。



週に数回、音楽科の人たちに混じって合唱したり、私の得意なサクソフォンを吹かせてもらったりしていました。イタリアには部活動がないので、他学年との関わりがないのかと思いきや、学年関係なく活動していました。日本より留年率が高いのも関係があるかもしれません。音楽は言語を使わなくても人と繋がることのできる手段だとよく言われますが、完全に会話なしでは不可能です。最初の頃は先生の指示が理解できないことが多く、周りの子がよく翻訳してくれました。サクソフォンの先生は、言葉がわからない私をいつも気にかけて声をかけてくださり、日本の様子などをよく尋ねられました。先生の言葉をはやく理解できるようになりたいと思い、イタリア語の勉強を頑張るきっかけにもなりました。合唱と個人の歌のレッスンがあり、合唱では教会でみんなと歌ったり、オーケストラと合同で演奏したり、日本ではなかなかできない経験ができました。個人のレッスンは、これまた先生が日本好きな人で、日本人の友達がいるらしく、いなり寿司を作った話やイタリアには売っていない日本語の本をくださったり、イタリア特有の歌い方(喉ではなく、鼻を使う歌い方)を教えてもらったりしました。授業の内容が全然理解できない学校生活で、こうした音楽の活動は大きな楽しみになりました。

イタリアに来る前には全然予想しておらず、来てから初めて知ったイタリアの魅力の1つに、街並みが挙げられると思います。どこに行っても必ず1つは目にする大きくて立派な教会や、ピンクやオレンジ、黄色など、色とりどりの家、石が敷き詰められた道の美しさにとっても感動しました。通学するときに2つ隣り合わせになっている教会の横を歩いていましたが、1つはとても古く、他の土地よりも地面が下がっていて、歴史を感じました。歴史あるたくさんの建物がクリスマスにはイルミネーションで飾り付けられて、昔と現代の融合を具現化した魅力を実感できます。キリスト教が信仰されているイタリアのクリスマスは日本とは少し違い、家族で過ごす日という考え方が根強く、2



4日の夜に家族で教会に行き、ミサに参加します。そしてパネットーネとパンドーロという伝統菓子を食べます。この2つはよく似ていますが、パネットーネはレーズンなどが入ったケーキで、パンドーロには何も入っていません。イタリアにはカフェやスイーツ店がたくさんありますが、日本人がクリスマスに食べるショートケーキのようなケーキは食べません。クリスマス以外の時

期でも見かけることはありませんでした。ベジタリアンやビーガンが多いのも関係あるのかもしれませんが。

ふとした発見の積み重ねから文化の違いをたくさん実感しました。トランプの遊び方や制服の有無、小学生の通学手段に休みの長さ、食事、挙げ始めるときりがありません。この長期留学を通して、とても視野が広がりました。イタリアについての知識を得たことはもちろん、日本から離れて暮らしたことで、身の回りの当たり前で意識していなかったことに気づき、家族や友達のありがたさも実感しました。

今ではイタリアは私の第二の故郷です。帰国して出会う人に「イタリアに戻りたいか」とよく聞かれますが、機会を見つけて絶対に戻りたいです。長いフライトが大変ですが、たくさんの人に行ってみてほしいです。きっと私のように、イタリアに夢中になるに違いありません。